

# 新しい世界の発見と 未分化への回帰

—造形と音楽の視点から—



名古屋学芸大学 准教授 水谷誠孝

## 1、はじめに

「みる」「きく」という行為を通して、さまざまな素材から色や形、音などを感じて表現する活動は、諸感覚から得られた情報について思考して表す体験につながります。この体験は感覚の発達を促し、新しい見方や感じ方を発見することに繋がります。今回ご紹介する実践は、筆者と麓洋介（愛知教育大学/音楽表現）とで2009年より行っている共同研究の一部です。現在は、岡田暁子（名古屋学芸大学/音楽表現）も加わり「科研費 基盤研究（C）「遊びにおけるコミュニケーションによって展開する即興的音楽表現教育プログラムの開発（研究代表者麓洋介）」として継続しています。

## 2、造形表現の過程を活用した音楽表現の活動

この実践は、造形表現の行為の過程におこる、さまざまな要素を音楽表現に応用し、造形表現と音楽表現を総合的に捉える試みです。「スパッタリング」「デカルコマニー」「フロッタージュ」「マーブリング」の描画技法を過程（プロセス）の観点から「技法の概念や特徴」、「制作過程に生じる行為」、「行為から発生する現象」（図1）に整理し、音楽表現に応用しています。

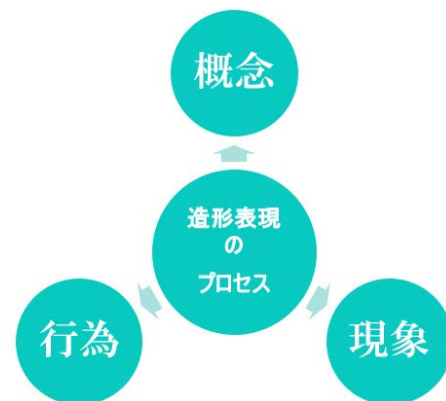


図1.造形表現のプロセスに生じる  
概念・行為・現象<sup>1)</sup>

### 「フロッタージュ（写真1）」

対象に紙をあて、色鉛筆などで擦り出し、凹凸面を写しとることで素材の形状の違いによってさまざまな模様が浮かび上がります。造形表現の「擦る（仏：frotter）」という概念や、凹凸面を写しとる行為、素材の形状によって様々な模様が浮かび上がる現象を利用します。実践では、造形表現で実際にフロッタージュを行った後、同じ素材を使って音楽表現に移ります。



写真1. フロッタージュ

造形表現での素材との対話を活用し、音楽表現で素材にどのように触れるかを模索します。体や道具を活用して、凹凸面を擦り出すように触れて素材の音を見つけ出していきます（写真2）。素材は描画の対象であると同時に音を鳴らす対象となり、音楽を生み出します。この実践は、造形表現と音楽表現で同じ素材に対してアプローチすることになり、造形表現でイメージしたことや発見したことを音楽表現でイメージすることができます。そのため、造形と音楽の表現の認識をもってひとつの活動に取り組むことができます。



写真2. 素材に触れて音を見つける

### 「デカルコマニー（写真3）」

フランス語の décalquer（転写する）に由来し、紙に絵具を挟み2つ折りにする、絵具をのせたガラス板に紙を押し当てるなどの方法があります。転写することによって紙面に偶発的な模様を獲得します。この「転写」の概念を活動のなかで音楽表現と結びつけます。造形表現では、転写する概念と、絵具に紙を押し当てる行為、紙面に偶発的な模様ができるといった現象がみられます。これを活用して、音楽表現では写す側と



写真3. デカルコマニー  
（絵具に紙を押し  
当てた作品）

写される側とに分かれ、コミュニケーションを伴った音楽表現の遊びとして展開します(写真4)。実践者は2つのグループに分かれ、楽器を同様に配布されます。同じ楽器を持つ相手の動きに注目して、一方のグループが自由に表現し、もう一方のグループはそれを模倣(転写)します。造形活動では、転写の概念がより伝わりやすいよう、実践ではガラス板(ラップと板で代用)に紙を押し当てる方法も取り入れています。



写真4. 写す側と写される側に分かれる

#### 「スパッタリング(写真5)」

網に付着した絵具がブラシによって網を通過し、色彩が霧状の細かな粒となって画面上に定着します。造形表現では、技法の概念、絵具を網に付けてブラシで擦る行為、網の上にあった色彩が霧状の細かな粒となって舞い画面上に定着する現象がみられます。音楽表現では、画面を空間に、色彩を音に見立て、実践者が意識的、無意識的に発する音が織りなす音響空間を即興的な音楽作品と捉えます。この実践(写真6)では、スパッタリングでの制作過程における現象についてディスカッションを行った結果、床を紙面に、参加者を絵具の細かな粒に見立てることになりました。自分を絵具の飛沫の動きに見立て、激しく動いています。



写真5. スパッタリング



写真6. 自分を絵具の粒に見立てている

### 「マーブリング (写真7)」

水面に専用の絵具を垂らし、模様を写しとる技法です。水面に漂う絵具を割り箸などでかき混ぜることにより、複雑な模様ができます。模様を作り出す概念や、様々な色彩が漂う現象、かき混ぜる行為を音楽表現に活用します。音楽表現では、これらの造形活動の概念や現象、行為を奏者同士のコミュニケーションとして応用します。はじめにマーブリングによる造形活動を行い、マーブリングによる制作過程や特徴について振り返ります。その後、グループで劇的なコミュニケーションをキーワードに遊びを考えてもらい、音楽表現を行ないます (写真8)。これまでの実践から、奏者の劇的な意識が、即興的な音楽表現で生み出される音楽に影響を及ぼすことが示唆されているため、音楽表現に「コミュニケーション」「役割」「ストーリー性」を取り入れ、音楽表現と劇表現を結びつけることにしています。



写真7. マーブリング



写真8. 水面に漂う色が混ざり合う現象や、かき混ぜる行為を活用して音楽表現を行う

### 3、子供と工夫

活動を行う際は、自ら素材を選び、自分で活動に取り組む環境を構成できるよう心がけています。ピアジェは、「子どもたちは自ら実験をし、自ら研究することができる状態になければならない」「子どもがあるものを理解するためには、自らそれを構成せねばならない」と述べて<sup>2)</sup> います。子供が自ら環境を整え、発見し、思索し、自分なりの表し方を工夫するといった能動的な学びの体験ができることを大切にしています。それは探求する心と実感を伴



表し方を考え、工夫する

う理解とともに子供の心に深く根付いていくことになります。

#### 4、遊びと表現

活動では、遊びの要素も大切にしています。遊びは人間の本質的な営み<sup>3)</sup>であり、遊びが美的芸術を支えて<sup>4)</sup>います。子供は遊びながら素材と関わり、遊び方や感じ方、表し方を工夫する楽しさを見出していきます。また、遊びは自由な環境で自発的に行われることが重要<sup>5)</sup>です。子供は自由に遊ぶなかで楽しみながら素材に触れ、感じたことや発見したことをもとにイメージを膨らませ、試行錯誤を繰り返し、自分なりの表現を見付け出していきます。

#### 5、新しい世界の発見と未分化への回帰

造形表現と音楽表現を越境し、表現を総合的に捉えた活動は、その過程で「みる」「きく」といった行為に集中することになります。感覚を通して身の回りの環境に関わり、感じたことをもとに考え、工夫し、自分なりの表し方を思索するこのような体験は、目や耳、体などの感覚器官や脳の発達を促すため、身の回りの環境の捉え方が豊かになり、自分と環境との関係を密接なものとしていきます。それは、新しいものの見方や捉え方を発見することに繋がり、自分や現実との新たな出会いを生み、新しい世界の発見へと子供たちを導きます。

一方で、こうした造形と音楽の領域を越境する活動を保育を学ぶ学生が体験することは、各表現領域を分化せずに捉えるきっかけになります。子供の表現は未分化であり、領域に分化して行われません。学生は活動を通して、自らが子供の頃に行った未分化の表現に回帰することになります。それは未分化の表現をする子供の気持ちを受容することにつながり、保育における子供の表現活動の支援に活用できるのではないのでしょうか。



学生は表現を総合的に捉えた活動を通して未分化の表現に回帰する

本研究は JSPS 科研費 JP21K02490 の助成を受けたものです。

<参考・引用文献>

- 1) 水谷誠孝・麓洋介「造形表現を手がかりにした『音楽を生み出す遊び』の検討－造形表現のプロセスの視点から－」,  
日本美術教育学会誌「美術教育」304号, 2020, p.184
  - 2) J.ピアジェ/E.H.エリクソン『遊びと発達の心理学』, 黎明書房, 2000, pp.25-26
  - 3) ヨハン・ホイジンガ, 里見元一郎訳『ホモ・ルーデンス 文化のもつ遊びの要素についてのある定義づけの試み』  
講談社学術文庫, 2018
  - 4) フリードリヒ・フォン・シラー, 小栗孝則訳『人間の美的教育について』, 法政大学出版局, 2003, p.99
  - 5) ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』, 講談社, 1990
- ・佐藤学・今井康雄編, 『子どもたちの想像力を育むアート教育の思想と実践』, 東京大学出版会, 2011
- ・日本美術教育学会 70 周年記念論集編集委員会「日本美術教育学会 70 周年記念論集 未来につなぐ美術教育」三元社,  
2021 年